



漁師列伝

No.8

明るい漁業の未来に向けて ～孫へつなぐ漁業の夢～

開発調査センター 山下秀幸, 宮原 一

三重県で唯一の沖合底びき網漁船である第十八甚昇丸の漁労長石倉 實さんは、先祖から受け継ぐ二十五代目の漁師です。父親の代にはまき網漁業を営んでおり、小学校のころから船の仕事を手伝うのが楽しく、船酔いとも無縁だったそうです。24歳の時に漁労長を任されてからは、長年まき網船団を仕切ってきました。

「近年は日本の漁業に勢いのあった頃とは違い、大量投資、大量漁獲の時代ではない」との考えから、船や乗組員を多く要するまき網漁業から15年ほど前に底びき網漁業への転換を図りました。

んと寂しい町であることか」と感じたそうです。そこで、何とか町おこしができないものかと、仲間と漁獲物を持ち寄って産直販売を試みました。当初は集客力もなく、魚は集まっても人が来ないという状況が続きました。そこで、地元の観光協会とも協議し、町議会へも話を持ち込み、企画の改善や予算獲得へとつなげていきました。その成果が実り、今では水産物のみならず、農産物や地域の特産品が多く出品される「きいながしま港朝市」として定着し、毎回地域内外から多くの方が訪れています。



操業中の石倉漁労長



漁獲物の取り込みは丁寧かつ迅速に

地域活性化に向けて

平成11年から6年間は、紀伊長島漁協の組合長を任せ船を下りていました。若い頃から沖へ出る生活が長かったため、初めての陸暮らしをし、「我が地元の長島は、な

持続的漁業のために

組合長を退任してからは、再び舵をもち沖へ出る生活へと戻りました。資源を大切にせねばならないとの思いから、それまでは漁獲されても投棄していたナマコに着目

し、現在では中国向けとしての出荷の他、大学とも連携してその有効成分を化粧品への利用にもつなげています。魚が獲れない時はナマコを獲る、そうすることによって漁業経営を維持し、かつその間の漁場への漁獲圧を低減するため、資源の保全にも貢献できます。



活魚は1尾1尾丁寧にエア抜きをする

この地区の底びき網漁業の主要魚種の一つであるニギスは、地域では欠かせない干物原料です。しかし価格の変動が大きく、水揚げが多いと単価が落ち込みます。例えば100ケース水揚げしても50ケース水揚げしても量に応じて単価が変わるので、水揚げ金額はさほど変わりません。同じ水揚げ金額を得るのに、魚を大切に少なく水揚げした方が将来に繋がります。そこで同じ漁場を利用する底びき網の船頭さん達に提案し、将来に向けて資源を維持し価格を維持するためにも、むやみに魚を獲るのではなく、お互い相談して水揚げ量を調整しようとしています。ニギスに限らず、魚の価値をいかに引き出して、さらに付加価値をいかに付けて消費者に届けるかが、これからの時代には重要となります。

次世代へつなぐ漁業の夢

このように地域や漁業の活性化に励んできましたが、残念ながら後継者となる息子さんはいませんでした。しかし、嬉しいことに、水産高校へ通うお孫さんが将来跡を継がれるとのことでした。孫に譲る船を確保するために様々な工夫を取り入れた新船建造も予定し、効率的な漁網の開発にも積極的です。各地で漁業者の高齢化や後継者不足が危惧されるなか、石倉さんはしっかりと将来を見据えています。お孫さんに船頭を任せ後は、ニギス等の干物を作る仕事を始めたいとの将来像を私たちに語ってくれました。

今回、漁具計測のため乗船させて頂きましたが、石倉漁労長の下で働く乗組員は全て20代で、皆さん目を輝かせてとっても良い顔をして体を動かしている姿が印象的でした。漁業の将来もまだまだ期待できると感じました。



主要な漁獲物は直ちに冷海水にて冷却

石倉さんは俳句も嗜まれるとのこと、地元出身の俳人に因んだ三浦樗良顕彰祭で大賞を受賞された他、海や漁をテーマにした句で何度も入賞されているそうです。

「沖へ出て 海一面の 月光下」 石倉 實